

第2章 銃後

子どもたちの生活②

堂々と白米食べれば、非国民

柳瀬 智さんのお話から

私は昭和六年（一九三一年）生まれで、昭和十三年に今の清田小学校のところにあった厚別尋常小学校に入りました。昭和十六年に学校も国民学校というものになり、教育の中身も軍隊色がぐっと濃いものになったのです。国民学校初等科の卒業は昭和十九年でした。このころは、清田に住んでいる人はほとんど農業で暮らしていて、それ以外といえば、お寺さんと学校の先生と農協の職員と警察、それと商店が一軒か二軒あった程度でした。

私が国民学校に通っているときは、村に住んでいる人に召集令状が来ると、一人でも多くの人が出て、校門に整列して出征兵士を村外れまで送りました。地区の婦人会と三年生以上はみんな出ていたと思います。月寒一二五連隊へ入隊する兵隊さんは、今の北野一条一丁目のあたりまで、厚別駅の方に出る兵隊さんは、今の北野まちづくりセンターのあたりまで送りました。これがもう何十回と数え切れなくらいの回数でした。

出征兵士の母親は「命を惜しいと思うな。」と言って送り出したものです。でも、心の中と言っていることは違います。「泣いては後ろ髪引かれる思いをする。明るく送り出してあげよう。それが銃後を守る人の務めだ。」と涙をこらえて我が子を送り出したのだと思います。学校の教育も、天皇陛下のために尽くせということ、**「国に奉公できることは誇り。出征できたら人生の最高。」**というものでしたから、そんなときに泣いたら**非国民**という時代でした。

私の兄は大正十四年（一九二五年）生まれで、昭和十九年（一九四四年）に徴兵検査があり、甲種合格となり出征しました。旭川へ入隊するときには札幌駅まで見送りました。出征兵士

○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

○銃後 戦場の後方。直接戦闘に加わらない一般市民。

○非国民 当時の日本では、戦争に協力しない者や戦争に反対していると見なされた者を、国民としての義務を守らない者、国家を裏切るような行為をする者として**非国民**と呼び非難した。

○英霊 優れた人の霊魂。死者の霊の尊称。特に戦死者の霊に言う。

○上げ膳 食膳を取り下げる。また食膳を差上げる。

○復員 戦時の体制にある軍隊を平時の体制に復し、兵員の召集を解くと。また召集を解かれた兵士が帰郷すること。

ばかりを乗せた十数両もの臨時列車に乗って行きました。どこかは分からないけど、この列車に乗っているのだらう、そういう思いで見送りをした記憶があります。当時、家族は兄が生き返るとは思ってもいませんでした。仏さんのように食堂の壁に小さな棚を作って、兄の写真をお供えて、朝も晩もご飯をお供え、もう死んだ英霊のような思いでいました。仏さんになって帰ってくるのだという覚悟で親たちは、上げ膳をずっと続けていました。戦争に行くというのは、そういうことなのです。

幸いにも兄が復員して、とにかく軍隊生活は理不尽であるなど、軍隊のいろいろな話を聞きました。日本から食料が届かないので、銃剣で脅して現地の集落から食べ物を買収したそうです。また、良いも悪いも関係なく、一人でも悪ければみんながたたかれるそうです。自分は何もしていないのにビンタされたり棒でたたかれたりする教育だったそうで、「どうして悪くない人がたたかれるのか。」と思ったそうですが、そんな理屈は通るはずありませんでした。

昭和十九年頃になると、私も率先して志願兵になるよう心の準備をしておきなさいと言われるようになりました。まだ十六歳にならないうちに、そういう風に仕向けられるのです。特



イメージ図

出生した兄の写真をお供えていた

○供出 国などの要請によつて物資を差し出すこと。

に、次男、三男が言われました。

終戦前は、銃後を守るのも大変でした。出征してしまつて人手がない農家の水田へ手伝いに行きました。家から往復四キロはあつたと思います。北野にあつた農場にも草取りの手伝いで援農しました。仕事も本当に過酷でした。銃後を守る義務というか、それが当たり前だったから、なんとかやつたという記憶があります。

その頃は、何でも物不足の時代で、もちろん贅沢なんてできません。私は農家だから、食べる米はありました。でも、供出の割り当てがあり、熟練の検査官に「自分の目は確かだ。この家には何俵かあるはずだ。」と言われて、なんとかしてそれだけの米を供出したものです。残つたのは自分の飯米だけ。それもクズ米のたぐいです。学校には白米の弁当なんて持つて行けません。そんな裕福は許されません。その代わり、クズ米、ぬか、麦、豆などを入れました。そういう弁当でないと、人前で食べられないのです。もし、白飯なんてものを持って行こうものなら、たちまち非国民だと責められます。犯罪に等しいのです。日本中がとにかく節約して食糧を守らなければと我慢をしているときに「農家だから白飯を食べてもいい。」な



イメージ図

学校でクズ米やぬかの弁当を食べる様子

○大東亜戦争 昭和十六年（一九四一年）十二月八日、日本政府はアメリカ、イギリスとの開戦後、それ以前から継続中だった日中戦争を含めて、「大東亜戦争」（大東亜とは東アジア・東南アジアのことと呼んだ。これに対してアメリカ側では、対日戦争を「太平洋戦争」と呼び、戦後の日本でもこの呼び名が定着した。

○アッツ島 アリウーシャン列島の島。昭和十七年（一九四二年）六月、ミッドウェー作戦と並行して日本軍が占領。しかし、昭和十八年（一九四三年）五月、およそ二六〇〇名の日本軍守備隊に対して、アメリカ軍の攻撃が開始され、日本軍部隊の最後の残存兵三〇〇名が全滅した。

なんていう話にはなりません。そういうものだと思っていました。

食糧だけではありません。昭和十八年から十九年にかけて、鉄砲の弾を造る金属が無いので国民あげて鍋釜などの金属を供出しました。しまいには、仏壇の金物も供出するほど、目に見えてものが無くなっていく感じがありました。国民全員が協力しなければならぬ時代だから、そういうしんどい心が許されないという感覚でした。戦争ではいろいろ大変な思いをしたものです。今、あしりべつ神社には、出征兵士の英霊百三十柱を祀っています。この大半が大東亜戦争の戦死者です。ほとんどが結婚をしないうちに出征して、アッツ島で玉砕したり、沖縄とかサイパンで戦死したりするなどして、男の子が誰もいなくなった家がたくさんあるのです。今でも戦没者の慰霊祭を春祭りの行事と一緒に務めています。現在、遺族会でお参りに来るのは十三軒くらいです。結婚していないうちに死んでしまったものだから、子どもがいませぬ。弟さんがいたとしても若くても八十歳を越えており、遺族もどんどん高齢化しているのです。戦後五十年を迎えた時に、法要の五十回忌と同じく遺族会もこれで最後にしてしまうという意見もありました。でも、今の平和はそういう方々の犠牲の上にあるのだから、できる限りその慰霊祭を務めていきたいと思っています。

DATA

平成21年度清田区平和事業

聴き取り

- ・平成21年9月28日
- ・清田区役所



柳瀬 智(やなせ・さとし)さん

- ・昭和6年(1931年)生まれ
- ・札幌市清田区在住

堂々と白米食べれば、非国民